



バイエル薬品株式会社

〒530-0001
大阪市北区梅田 2-4-9
TEL 06-6133-7333
www.bayer.co.jp/byl

News Release

「ずっと見たい、見せてあげたい」の実現を目指して

50～70代、健康寿命の全うに「目の健康」を最重視 一方で、目が悪くなったときの家族や周囲とのコミュニケーションは足りず

- 50～70代で、家族と見え方についてコミュニケーションをとっているのは、わずか 4.1%
- 「ずっと見て見たい」「ずっと見せてあげたい」ものがあり、アイコンタクトによるコミュニケーションを大切と感じる経験があるにも関わらず、「見たいものが見える」ことの重要性が十分に認識されていない可能性
- 「親や祖父母の目の健康チェックリスト」を使って、家族間のコミュニケーション促進を

大阪、2016年8月2日 — バイエル薬品株式会社(本社:大阪市、代表取締役社長:カーステン・ブルン、以下バイエル薬品)は、本年6月に、全国の50～70代(本人世代)の男女1,000名、および20～40代(下の世代)の男女で自身または配偶者の親や祖父母(50代以上)と同居または年1回以上顔を合わせている1,000名(合計2,000名)を対象に、健康的な老後のための目の健康に対する取り組みや加齢黄斑変性(AMD)の認知の現状について、調査を実施しました。

厚生労働省の国民生活基礎調査によれば、2015年6月時点で高齢者世帯は1271万4千世帯と、初めて全世帯の4分の1を超えました。今後も高齢化の進行により、高齢者世帯数、高齢者数ともに増加が続くと見込まれます。老後における個人の生活の質の低下を防ぎ、社会的負担を軽減する観点から、「健康上の問題で日常生活が制限されることなく生活できる期間」と定義される「健康寿命」を延ばすことが重要な社会的課題として求められています。視覚障害は、要介護に至る直接的な原因となりうるだけでなく、要介護につながる転倒や骨折リスクの上昇、各個人による全身疾患の治療のための服薬や自己注射の実施にも影響を与えうるため、健康寿命を妨げる要因となります。AMDなどの網膜疾患では、しばしば、中心視力が障害され、“見たいものが見えなく”なります。より多くの人が介添えを必要としない状態で健康寿命を全うするためにも、社会全体で目の健康意識を高め、そのための具体的な取り組みを推進することが必要であることから、20～70代すべての世代を対象に調査を実施しました。

【調査結果】

健康寿命の全うに「目の健康」を最重視

調査の結果から、健康寿命を全うする上で、本人世代が最も気にしているのは目の健康であることがわかりました。命にかかわる病気や寝たきりになる可能性がある病気である「脳の病気」「循環器系の病気」「がん」をしのぎ、1位(44.1%)となっています(別添資料1)。

目が悪くなったときの家族や周囲とのコミュニケーションは足りず

一方で、本人世代とその家族では、本人世代の見え方の悪化に関するコミュニケーションは十分に取られていない可能性が伺えました(別添資料2~7)。

- ◆ 本人世代の78.0%に見え方の悪化の自覚がある中、下の世代にはあまり伝わっておらず、下の世代でそのように認識(「そう思う・計」)している人は41.9%(別添資料2,3)。
- ◆ 本人世代において、自身の見え方が悪化した際、家族や周囲に「必ず伝える」は23.8%。中には、「伝えない」という人が16.3%に及ぶ。また、実際に、「家族と、見え方についてコミュニケーションをとっている」のはわずか4.1%(別添資料4,5)。
- ◆ 下の世代が親や祖父母の見え方の悪化を疑ったとき、本人に「必ず尋ねる」は16.0%。中には、「尋ねない」という人が18.8%に及ぶ。また、実際に、親や祖父母に「視力は低下していないか、見え方に変化がないか時々聞いている」のは12.1%(別添資料6,7)。

「見たいものが見える」ことの重要性が十分に認識されていない可能性

自立した健康的な老後を過ごすためには、いつまでも、自分で“見たいものが見える”ことが不可欠です。「ずっと見ていたい」「ずっと見せてあげたい」ものがあり、日頃、アイコンタクトによるコミュニケーションを大切だと感じる経験をしているにもかかわらず、目の健康のための具体的なアクションや上述のようなコミュニケーションが取られていないことがわかりました(別添資料5,7~9)。“見たいものが見える”ことの重要性が十分に認識されていない可能性が示唆されます。

- ◆ 本人世代がこれからも「ずっと見ていたい」もの、下の世代が本人世代にこれからも「ずっと見せてあげたい」ものがあるか聞いたところ、合計で62.0%が「はい」と回答。家族などの大切な人の笑顔や成長、美しい風景や、趣味に関するものなどが例として挙げられた(別添資料8)。
- ◆ 全世代に対し、日常生活において、アイコンタクトによるコミュニケーション(人と目を合わせるコミュニケーション)を大切だと感じた経験について聞いたところ、50.9%が「ある」と回答。具体的な場面としては、「自動車や自転車に乗っている時」の安全や「人前で話す時」に理解されているかを確認する場

面、「怪しい電話がかかってきた時」や「仕事で窮地に立たされた時」などに周囲に助けを求める場面などが挙げられた(別添資料 9)。

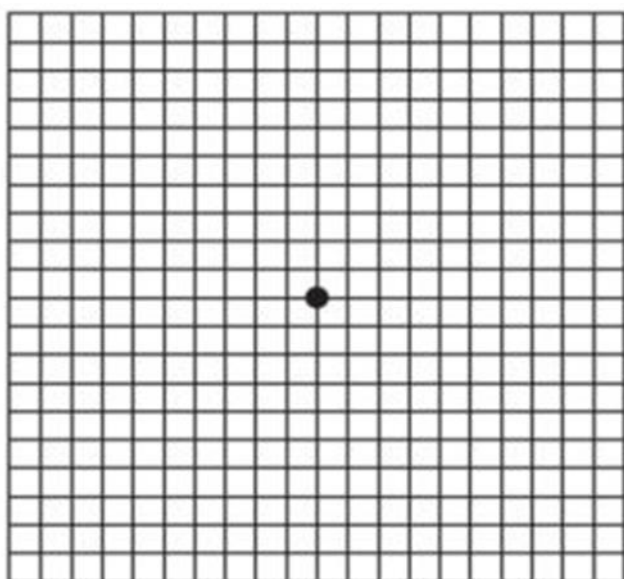
- ◆ 本人世代で自身の目の健康のために実施していることは「特にない」が最多で 29.2%。医師に頼るべき事柄と捉えている人は「気になる症状があったら、すぐに眼科に行く(29.0%)」「定期的に眼科で検診を受けている(24.8%)」とそれぞれ 3 割にも満たない(別添資料 5)。
- ◆ 下の世代が親や祖父母に対して実際にしていることを質問したところ、「親や祖父母の目の健康に関する会話は特にしていない」が 51.3%にのぼる。親や祖父母の目の健康に対するより具体的なアクション(「定期的に眼科を受診するように促している」「定期的に視力検査を受けるよう促している」など)については、それぞれ、実施しているのはわずか 5~6%程度(別添資料 7)。

疾患認知は世代間ギャップが課題

AMD の認知率は世代が上がるにつれ上昇(50~70 代:75.5%、20~40 代:48.3%)しています。自己チェックができるシート「アムスラーチャート」の認知率も同様の傾向で、世代間の認知のギャップが課題であることが示されました(別添資料 10, 11)。家族における目の健康に関するコミュニケーションを推進するには、疾患や自己チェック方法について、より若い世代における認知向上が求められます。

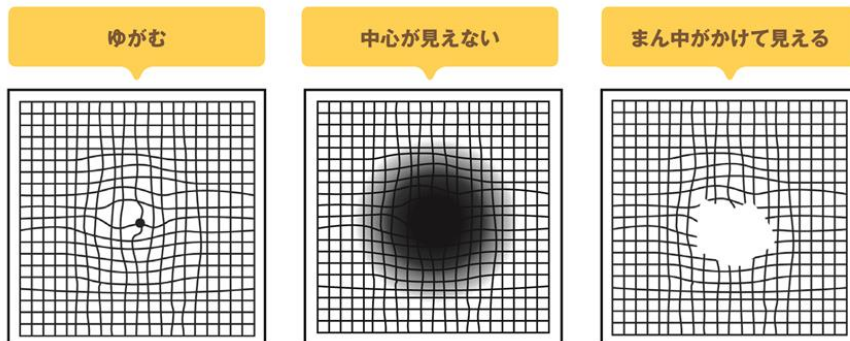
- ◆ 目の異常を検査するための格子状の表「アムスラーチャート」の認知率は、本人世代で半数を越え、51.6%に。一方、下の世代では 33.7%であり、本人世代と比較して低い結果。アムスラーチャートを見たことはあっても、それを使って見え方のチェックをしたことがない人も存在する(別添資料 11)。

ご参考:アムスラーチャートによる自己チェック方法



1. 片目をつぶって、中心の点をまっすぐに見ます。
2. 約30cm離してチェックします。
3. 老眼鏡や近視の眼鏡はかけたままチェックします。

■ 下記のように見える場合は、加齢黄斑変性である可能性がります。



図表: バイエル薬品資料より

【「親や祖父母の目の健康チェックリスト」を使って、家族間のコミュニケーション促進を】

今回の調査で、目の健康に関する家族や周囲とのコミュニケーション機会が足りない可能性が示されたことから、バイエル薬品ではその促進につながればと「親や祖父母の目の健康チェックリスト」(監修: 東京女子医科大学 眼科学教室 教授 飯田知弘先生)を作成しました(別添資料 12)。以下のうち、1つでもあてはまるようであれば、目に病気がある可能性があります。眼科受診を勧めましょう。

1. 「ものが見えにくい」と言っている
2. 「眼鏡を作りに行かなくては」と言っている
3. 暗いところで見えにくそうにしている
4. 時々、片方の目でもものを見ている
5. 階段の乗り降りが不安そうに感じる
6. 外出しなくなった
7. 車の運転をしなくなった
8. 小銭の見分けがつきにくくなったようだ
9. 文字をまっすぐ書くのが難しそうだ
10. よく人にぶつかっている
11. 外を歩く時にまぶしそうにしている
12. 知人とすれ違っても気づいていないようだ
13. 新聞を読んだり、読書したりする機会が減ってきたようだ
14. お茶などを注ぐ時によくこぼしてしまっている
15. 続けていた趣味をやらなくなった

→1つでもあてはまるようであれば、目に病気がある可能性があります。眼科受診を勧めましょう。

監修: 東京女子医科大学 眼科学教室 教授 飯田知弘先生

調査および「親や祖父母の目の健康チェックリスト」を監修した東京女子医科大学 眼科学教室 教授の飯田知弘先生は次のようにコメントしています。「今回の調査では、目の重要性を感じている人が多いことを非常に嬉しく思いました。これを機に、家族で『見たい・見せたい』ものを改めて話し合い、何気ない日常にあるものを見られるということの大切さを感じる機会にさせていただければと思います。加齢黄斑変性は、

進行すると日常生活に影響を及ぼし、“見たいものが見えなく”なることから、健康寿命の全うに大きく影響する深刻な疾患です。自身や家族の目の健康を守るために、自己チェックシートやチェックリストを使って目の健康をチェックし、気になることがあればすぐに眼科に行く、受診を促すなど、具体的なアクションにつなげていただければと思います」

バイエル薬品では、「ずっと見たい」という患者さんの願い、「ずっと見せてあげたい」という家族などの周囲の方々の思いの実現を目指し、社会全体における AMD の認知向上と目の健康のための具体的な取り組みを推進してまいります。

【調査概要】

調査対象 全国の 20~70 代の男女 2,000 名

(50~70 代の男女 1,000 名 および 20~40 代の男女で、自身または配偶者の 50 代以上の親や祖父母と同居または年 1 回以上顔を合わせている 1,000 名)

調査時期 2016 年 6 月 29 日(水)~6 月 30 日(木)

調査方法 インターネット調査

監修者 東京女子医科大学 眼科学教室 教授 飯田知弘先生

- 注記
- ・ 「健康寿命」は「健康上の問題で日常生活が制限されることなく生活できる期間」と定義
 - ・ 20~40 代には、自身や配偶者の 50 代以上の親や祖父母についての質問の際、あてはまる親や祖父母が複数いる場合は、一人を想定しても、全員を想定しても構わないとした
 - ・ 50~70 代を「本人世代」、20~40 代を「下の世代」と表記

【結果詳細】別添資料

こちらからもご確認いただけます ⇒ http://byl.bayer.co.jp/html/press_release/2016/news2016-08-02.pdf

過去の調査の詳細は、以下よりご覧いただけます。

2015 年 7 月実施: http://byl.bayer.co.jp/html/press_release/2015/news2015-07-27-a.pdf

2014 年 7 月実施: http://byl.bayer.co.jp/html/press_release/2014/news2014-08-08.pdf

2013 年 8 月実施: http://byl.bayer.co.jp/html/press_release/2013/news2013-09-19.pdf

加齢黄斑変性(AMD)について

AMD は中途失明の主な原因のひとつです。AMD は、萎縮型または滲出型のいずれかに分類されます。滲出型の場合、網膜下で病的な新生血管が形成され、滲出液の漏出等により網膜の破壊や機能障害が起こり、視野の中心部に歪みや暗点がみられるようになります。さらに症状が進行すると高度な視力障害

に至る場合があります。滲出型加齢黄斑変性は、欧米で、65歳以上の失明の主な原因となっています。日本では、中途失明原因の第4位¹で患者数は増加傾向にあります。

参考文献:

1 Ophthalmic Epidemiology, 17(I), 50-57, 2010: "Prevalence of Visual Impairment in the Adult Japanese Population by Cause and Severity and Future Projections" Masakazu Yamada, Yoshimune Hiratsuka, Chris B. Roberts, M. Lynne Pezzullo, Katie Yates, Shigeru Takano, Kensaku Miyake, and Hugh R. Taylor

バイエルについて

Bayer: Science For A Better Life

バイエルは、ヘルスケアと農業関連のライフサイエンス領域を中核事業とするグローバル企業です。「Science For A Better Life」というミッションのもと、バイエルはその製品とサービスを通じて、人々のクオリティ・オブ・ライフ (QOL) の向上に貢献すると同時に、技術革新、成長、およびより高い収益力を通して企業価値を創造することも目指しています。また、バイエルは、持続可能な発展に対して、そして良き企業市民として社会と倫理の双方で責任を果たすために、これからも努力を続けます。グループ全体の売上高は463億ユーロ、従業員数は116,800名(2015年)。設備投資額は26億ユーロ、研究開発費は43億ユーロです。この数字は、コベストロ社として株式市場に2015年10月6日に上場した高機能ポリマー材料の事業を含んでいます。詳細は www.bayer.com をご参照ください。

バイエル薬品株式会社について

バイエル薬品株式会社は本社を大阪に置き、医療用医薬品、コンシューマーヘルス、動物用医薬品の各事業からなるヘルスケア企業です。医療用医薬品部門では、循環器領域、腫瘍・血液領域、ウイメンズヘルスケア領域、眼科領域、画像診断領域に注力しています。コンシューマーヘルス部門では解熱鎮痛薬「バイエルアスピリン」をはじめ、アレルギー性疾患治療剤や皮膚科領域に注力しています。動物用医薬品事業部は、動物用医薬品の提供を中心にコンパニオンアニマルおよび畜産動物のヘルスケアに貢献しています。同社は、「Science For A Better Life」というミッションのもと、技術革新と革新的な製品によって、日本の患者さんの「満たされない願い」に応える先進医薬品企業を目指しています。詳細は www.bayer.co.jp/byl をご参照ください。

バイエル薬品株式会社

2016年8月2日

将来予想に関する記述 (Forward-Looking Statements)

このニュースリリースには、バイエルグループもしくは各事業グループの経営陣による現在の試算および予測に基づく将来予想に関する記述 (Forward-Looking Statements) が含まれています。さまざまな既知・未知のリスク、不確実性、その他の要因により、将来の実績、財務状況、企業の動向または業績と、当文書における予測との間に大きな相違が生じることがあります。これらの要因には、当社の Web サイト上 (www.bayer.com) に公開されている報告書に説明されているものが含まれます。当社は、これらの将来予想に関する記述を更新し、将来の出来事または情勢に適合させる責任を負いません。

● 健康についての意識（自身【50～70代】/親や祖父母【20～40代】）

別添資料

◆ 本人世代が健康寿命を全うする上で、目の健康を気にする割合は高く、特に本人世代では、命にかかわる病気や寝たきりになる可能性がある病気である「脳の病気」「循環器系の病気」「がん」をしのぎ、1位に。

Q1A. あなたは、自身の健康寿命を全うする上で、以下についてどの程度気にしていますか。(各単一回答)【全回答者ベース】(n=1,000)
 Q1B. あなたは、親や祖父母が健康寿命を全うする上で、親や祖父母の以下の健康についてどの程度気にしていますか。(各単一回答)【全回答者ベース】(n=1,000) ※回答肢5択のうち「とても気にしている」「やや気にしている」のTop2の計

自身の健康について気にしていること 【50～70代】全体 (n=1,000)	(%)
1 目の病気	44.1
2 脳の病気 (脳卒中、認知症など)	39.8
3 循環器系の病気 (心筋梗塞、狭心症、高血圧など)	39.4
4 がん	37.6
5 代謝、内分泌系の病気 (糖尿病、高脂血症など)	33.8
6 骨など整形外科に関わる病気	30.2
7 耳、鼻、のどの病気	29.9
8 消化器系の病気 (潰瘍、ポリープ、肝炎など)	27.0
9 呼吸器系の病気 (肺炎など)	23.9
10 生殖器系の病気 (前立腺、婦人科)	22.0
11 こころの病気	16.6

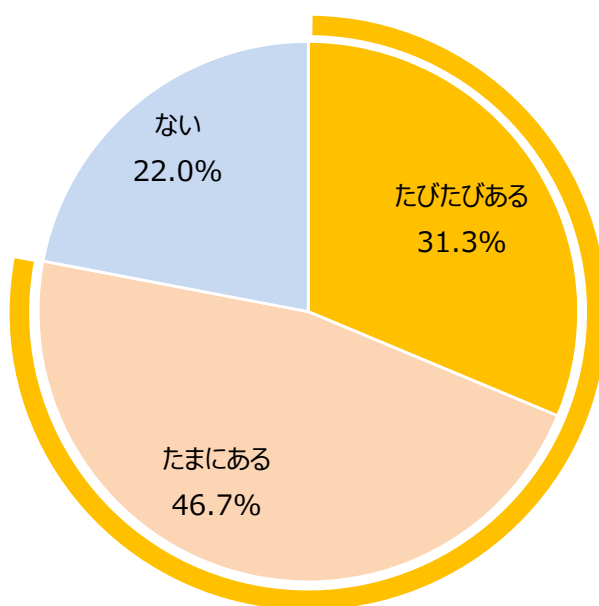
親や祖父母の健康について気にしていること 【20～40代】全体 (n=1,000)	(%)
1 脳の病気 (脳卒中、認知症など)	41.8
2 がん	39.5
3 循環器系の病気 (心筋梗塞、狭心症、高血圧など)	37.7
4 目の病気	32.7
5 代謝、内分泌系の病気 (糖尿病、高脂血症など)	31.7
6 骨など整形外科に関わる病気	27.8
7 消化器系の病気 (潰瘍、ポリープ、肝炎など)	27.2
8 呼吸器系の病気 (肺炎など)	27.1
9 耳、鼻、のどの病気	23.1
10 こころの病気	22.0
11 生殖器系の病気 (前立腺、婦人科)	21.3

1

● 目が以前よりも見えにくくなった自覚の有無【50～70代】

◆ 本人世代の78.0%が「目が悪くなった、以前より見えにくくなった」と感じている。

Q2A. 日常生活において、目が悪くなった、以前より見えにくくなったと思うことはありますか。(単一回答)【全回答者ベース】(n=1,000)



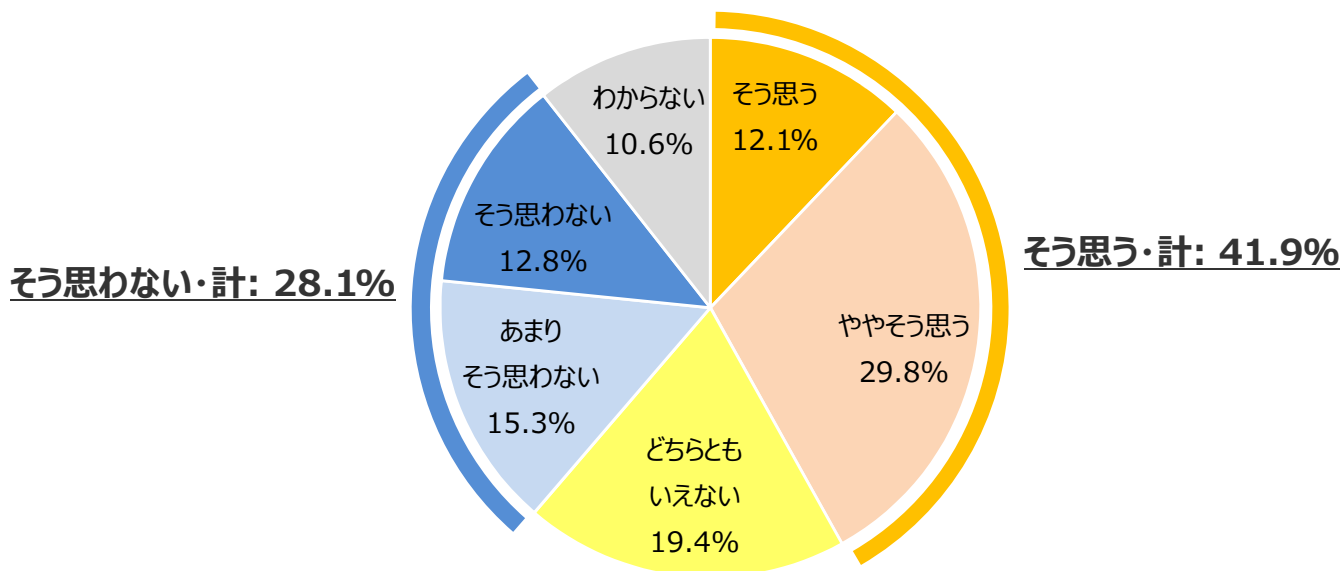
ある・計 : 78.0%

2

● 親や祖父母の目の状態について【20～40代】

- ◆ 下の世代が感じる、親や祖父母の見え方の悪化は、「そう思う・計」が41.9%、「そう思わない・計」が28.1%。
- ◆ 本人世代の8割近くに悪化の自覚がある中で、下の世代にはあまり伝わっていない。

Q2B. あなたは親や祖父母について、近年「目が悪くなった、見えにくくなったようだ」と思いますか。（単一回答）
【全回答者ベース】（n=1,000）

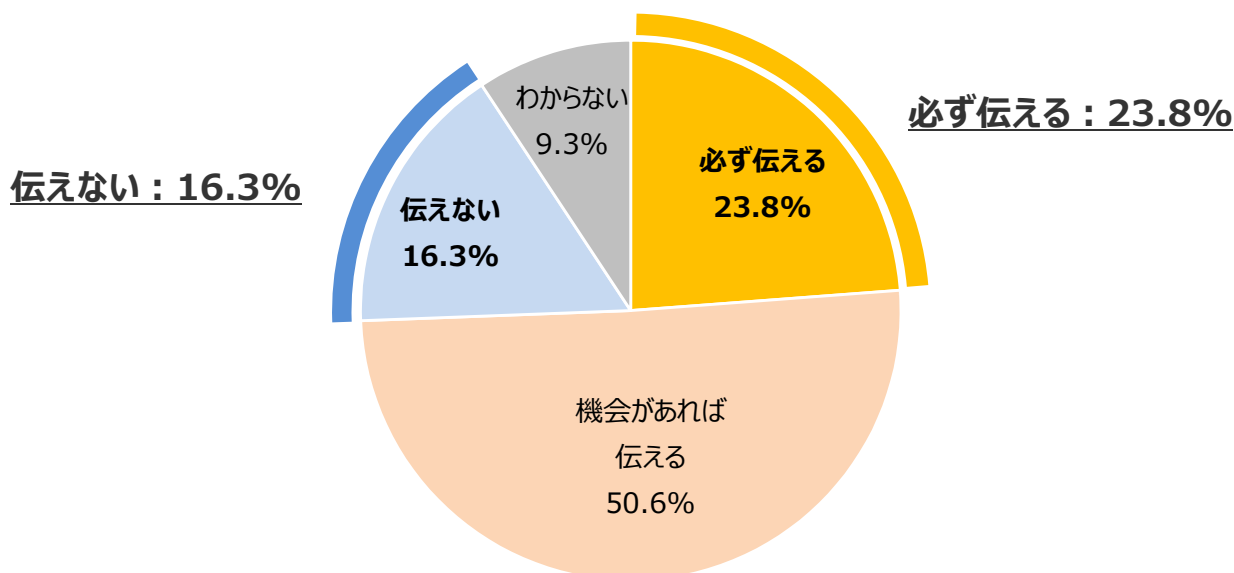


3

● 自身の目が悪くなった際の家族や周囲への伝達の有無【50～70代】

- ◆ 目が悪くなったと感じたとき、本人世代の約半数が「機会があれば伝える」としたものの、「必ず伝える」は23.8%のみ。
- ◆ 中には、「伝えない」という人が16.3%に及ぶ。

Q5A. 目が悪くなった、見えにくくなったと感じたときには、そのことを家族や周囲の人々に伝えますか。（単一回答）
【全回答者ベース】（n=1,000）

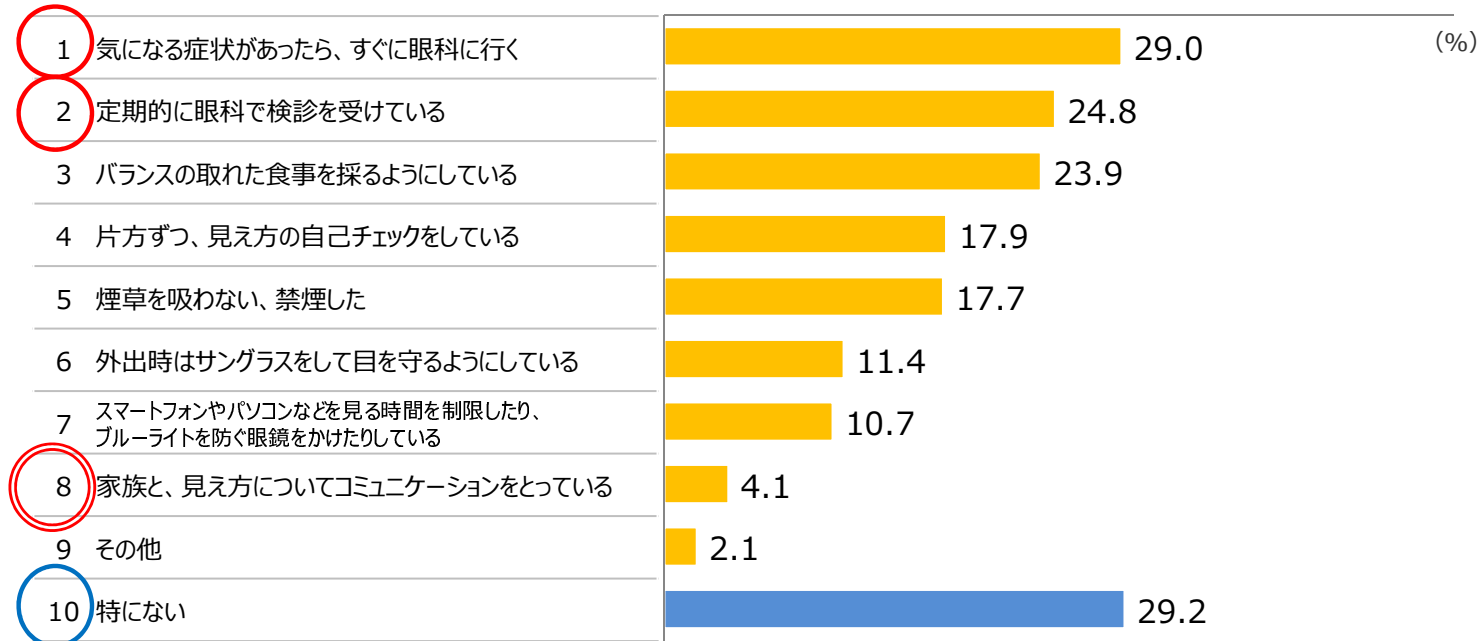


4

● 目の健康のために実施していること【50～70代】

- ◆ 実際には、本人世代で自身の目の健康のために「家族と、見え方についてコミュニケーションをとっている」人はわずか4.1%。家族と、目の健康に関するコミュニケーションを取る機会は少ない可能性。
- ◆ 目の健康のために実施していることは「特にない」が最多で29.2%。医師に頼るべき事柄と捉えている人は「気になる症状があったら、すぐに眼科に行く（29.0%）」「定期的に眼科で検診を受けている（24.8%）」とそれぞれ3割にも満たない。

Q7A. あなたが目の健康のために実施していることはありますか。あてはまるものをすべてお選びください。（複数回答）
※選択肢10は他選択肢と重複選択なし【全回答者ベース】（n=1,000）

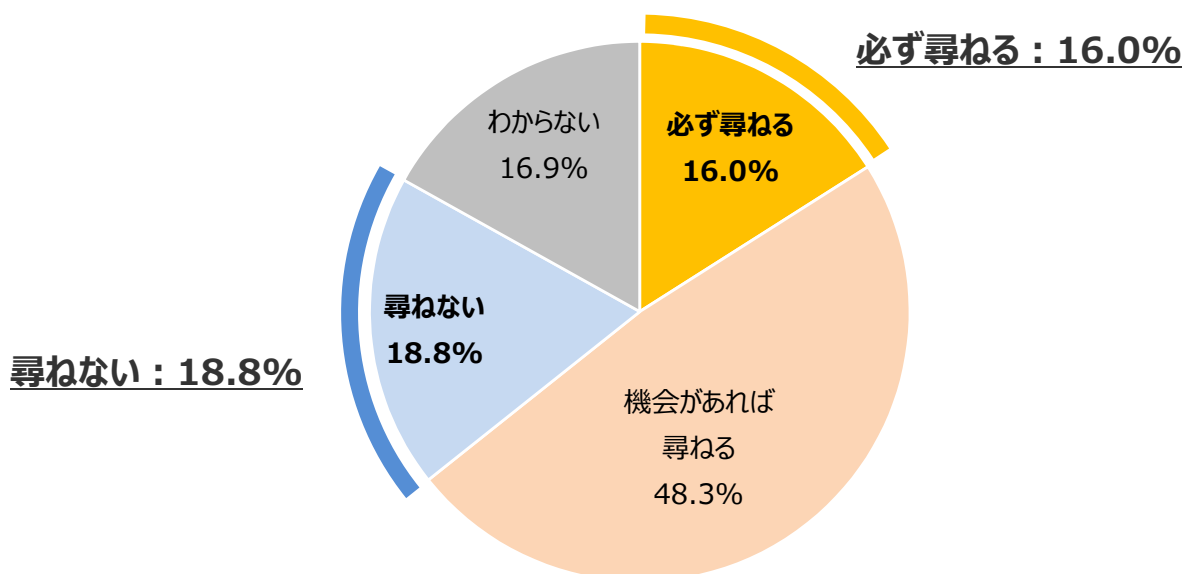


5

● 親や祖父母の目が悪くなった際、本人への確認の有無【20～40代】

- ◆ 親や祖父母の目が悪くなったと感じたとき、下の世代の半数近くが「機会があれば（本人に）尋ねる」としたものの、「必ず尋ねる」は16.0%のみ。
- ◆ 中には、「尋ねない」という人が18.8%に及ぶ。

Q3B. あなたは「親や祖父母が、目が悪くなった、見えにくくなったのではないか？」と疑ったときには、そのことを本人に尋ねますか。（単一回答）【全回答者ベース】（n=1,000）

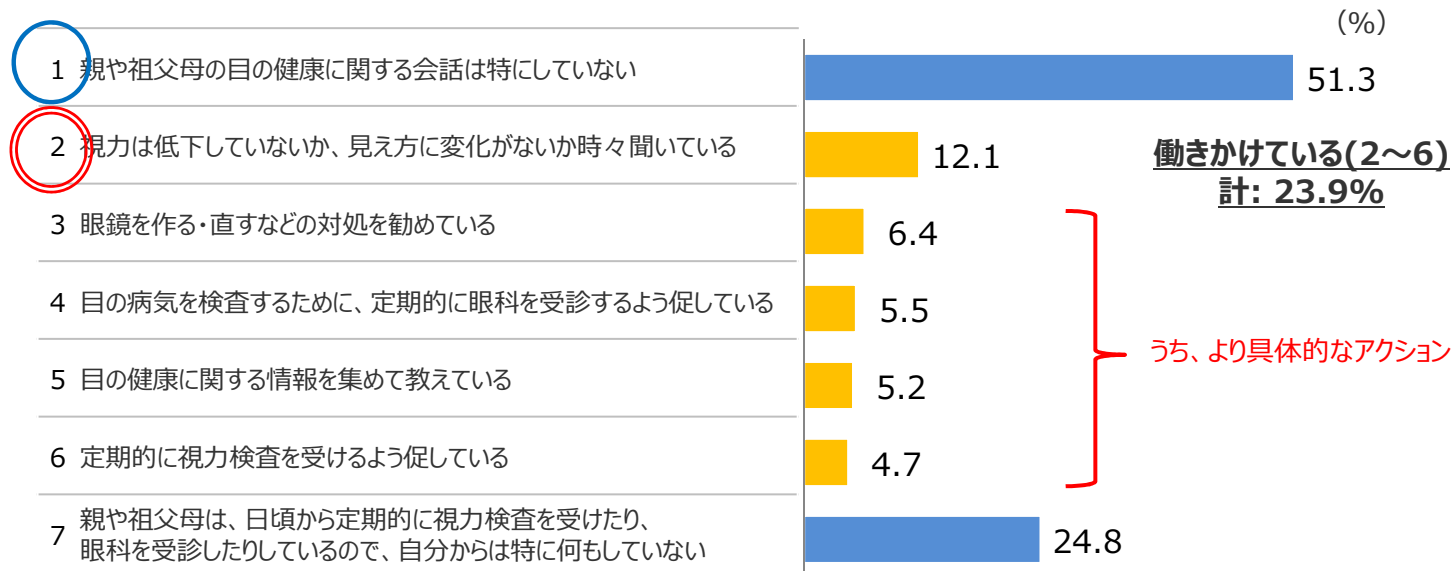


6

● 親や祖父母に実際にしていること【20～40代】

- ◆ 実際には、下の世代で、親や祖父母に対し「視力は低下していないか、見え方に変化がないか時々聞いている」人は12.1%。
- ◆ 「親や祖父母の目の健康に関する会話は特にしていない」が51.3%にのぼる。
- ◆ 親や祖父母の目の健康に対するより具体的なアクション（3～6）については、それぞれ、実施しているのはわずか5～6%程度。

Q5B. あなたが親や祖父母に対して、以下のうちで実際にされていることはありますか。あてはまるものをすべてお選びください。(複数回答) ※選択肢1と7は他選択肢と重複選択なし【全回答者ベース】(n=1,000)



7

● 「ずっと見ていたい・見せてあげたい」特別なものの有無【20～70代】

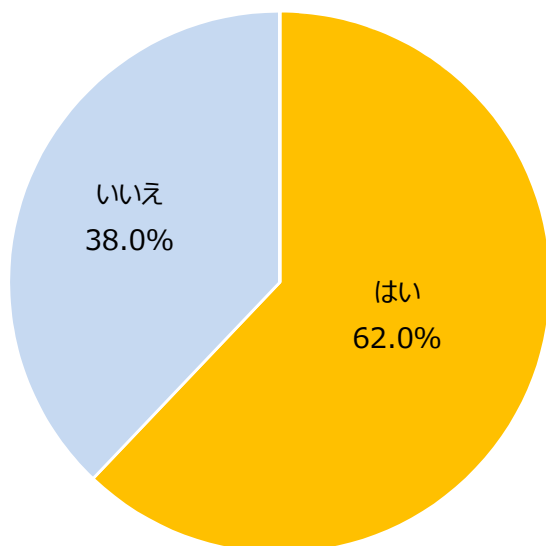
- ◆ 20代～70代全体の6割以上に、親や祖父母のこれからの人生において、それぞれ「ずっと見ていたい」「ずっと見せてあげたい」特別なものがある。

Q9A. これからの人生において、あなたが「ずっと見ていたい」特別なものはありますか。(単一回答)

【全回答者ベース】(n=1,000)

Q6B. あなたが、親や祖父母に「ずっと見せてあげたい」特別なものはありますか。(単一回答)

【全回答者ベース】(n=1,000)



多かった「ずっと見ていたい」もの回答例：

本人世代

- ・ 孫や子どもの成長
 - ・ 家族の幸せな顔
 - ・ 友達的笑顔
 - ・ 美しい自然、旅先・故郷の風景
 - ・ インターネット、本、ペット
- 「見えることは喜びにつながる」「すべて」「たくさんあり過ぎる」という声も

多かった「見せてあげたい」もの回答例：

下の世代

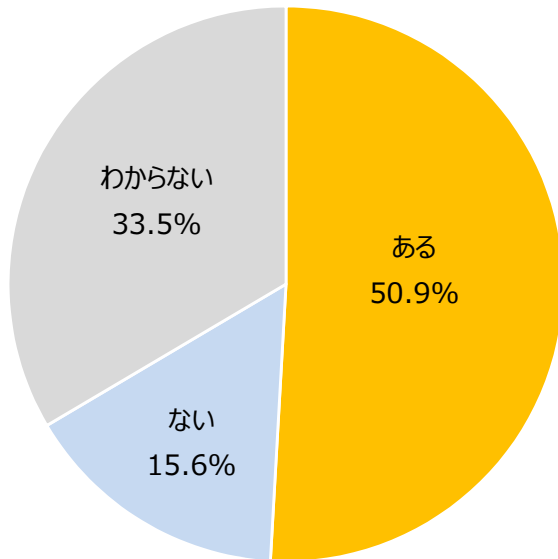
- ・ 孫や子ども、その結婚
 - ・ 家族的笑顔、成長、生活、元気な姿
 - ・ 庭や、四季の移り変わり
- 「私がいかに母に似てきたか」「新たな住宅の新築」「家族写真」という声も

8

● アイコンタクトによるコミュニケーションを大切だと感じた経験の有無【20～70代】

◆ 20代～70代全体の半数以上に、アイコンタクトによるコミュニケーションを大切だと感じた経験がある。

Q11A./Q8B. 日常生活において、アイコンタクトによるコミュニケーション（人と目を合わせるコミュニケーション）を大切だと感じた経験はありますか。（単一回答）【全回答者ベース】（n=2,000）



具体的な場面の回答例：

- ・ 自動車や自転車に乗っていて交差点などで目と目が合うとお互いが認識していると感じることができるので、事故を未然に防ぐことができる（50代男性）
- ・ 人前でお話をする機会があり、自分の話していることが理解されているかどうか、アイコンタクトを通じて感じることができる。（70代女性）
- ・ 怪しい電話がかかってきた時に、家族にアイコンタクトで知らせたことがあります。（70代女性）
- ・ 仕事上で窮地に立たされた時に、親友からの「俺がついているぞ」と言わんばかりのアイコンタクトがあったこと。（70代男性）
- ・ 先輩に伝えなければならないことがあったが、先輩の機嫌が悪かったので、同僚とアイコンタクトをとって話しかけるタイミングを探った。（20代女性）

9

● 加齢黄斑変性の認知率比較【年代別】

◆ 本人世代における「加齢黄斑変性」の認知率は7割を超えるものの、下の世代では48.3%。世代間の認知のギャップが課題。

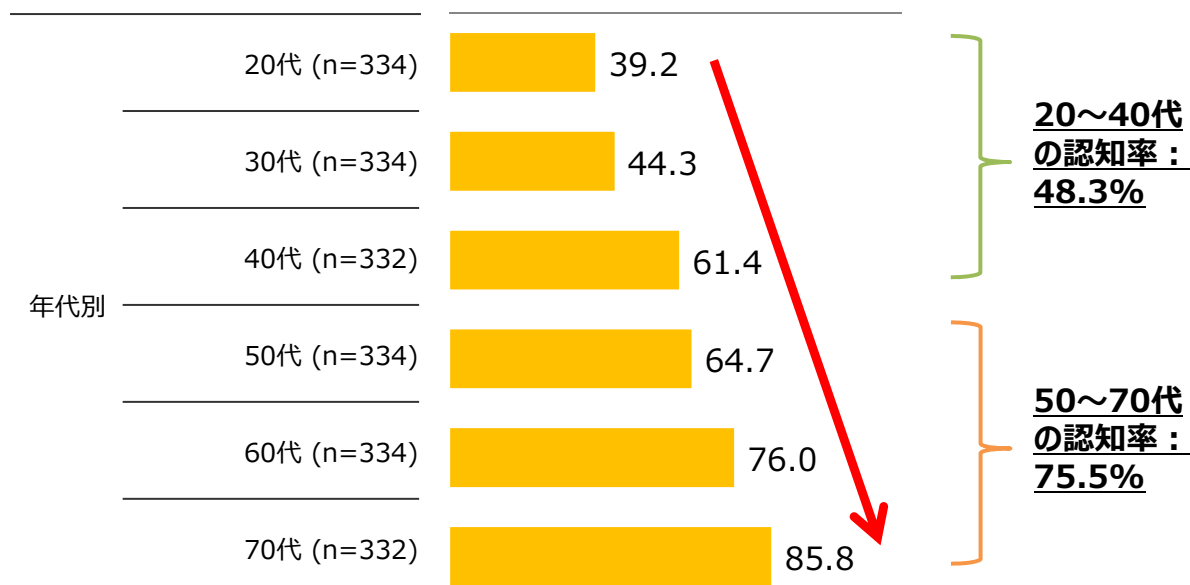
◆ 家族における目の健康のコミュニケーションを推進する上では、より若い世代における疾患認知向上が必要。

Q13A./Q10B. あなたは、以下の眼疾患をご存じですか。それぞれについてあてはまるものをお選びください。

（各単一回答）【全回答者ベース】（n=2,000）

※認知率 = 「どのような病気か、症状を含めて知っている」「病名を聞いたことがあるがどのような症状かは知らない」計

(%)

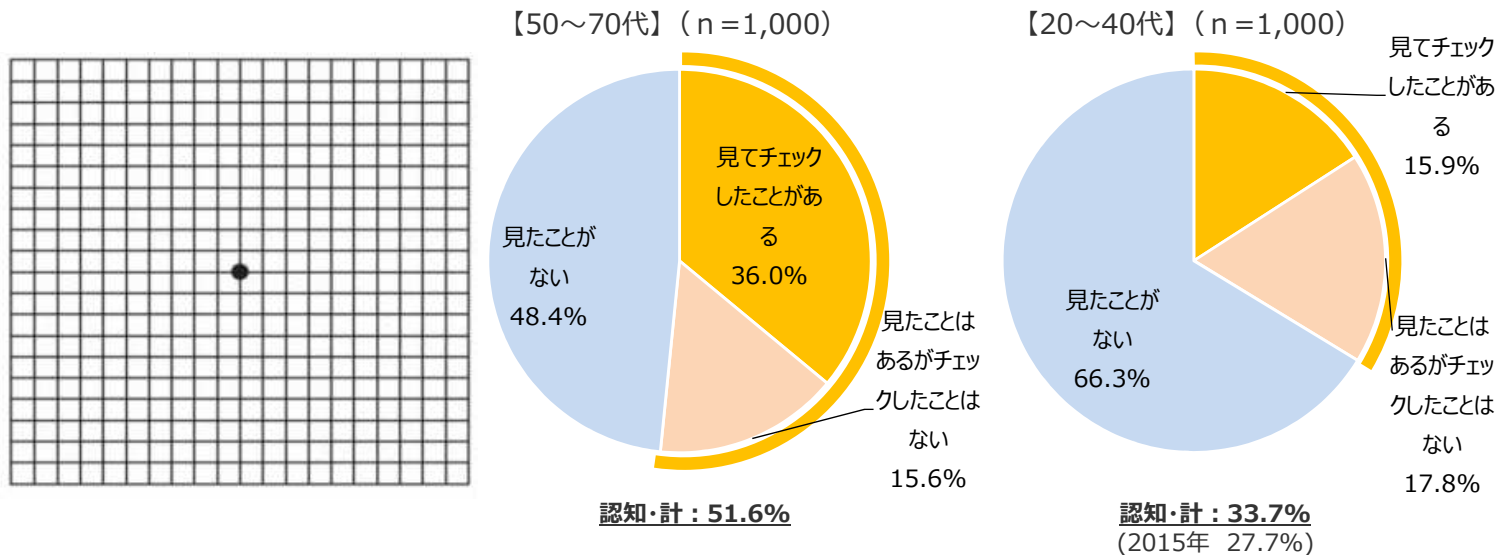


10

● アムスラーチャートの認知率比較【50～70代】/【20～40代】

- ◆ アムスラーチャートの認知率は、本人世代で半数を超え、51.6%に。一方、下の世代では33.7%であり、本人世代と比較して低い結果。
- ◆ アムスラーチャートを見たことはあるが、それを使って見え方のチェックをしたことがない人も存在する。

Q15A/Q12B. 以下の格子状表は「アムスラーチャート」と呼ばれる、目の異常を検査するためのチェックシートです。あなたは、過去にこのシートを見たことがありますか。そして見え方のチェックをしたことがありますか。
(単一回答)【全回答者ベース】(各 n=1,000)



11

親や祖父母の目の健康チェックリスト

- 1. 「ものが見えにくい」と言っている
- 2. 「眼鏡を作りに行かなくては」と言っている
- 3. 暗いところで見えにくそうにしている
- 4. 時々、片方の目でもものを見ている
- 5. 階段の乗り降りが不安そうに感じる
- 6. 外出しなくなった
- 7. 車の運転をしなくなった
- 8. 小銭の見分けがつきにくくなったようだ
- 9. 文字をまっすぐ書くのが難しそうだ
- 10. よく人にぶつかっている
- 11. 外を歩く時にまぶしそうにしている
- 12. 知人とすれ違っても気づいていないようだ
- 13. 新聞を読んだり、読書したりする機会が減ってきたようだ
- 14. お茶などを注ぐ時によくこぼしてしまっている
- 15. 続けていた趣味をやらなくなった

**1つでもあてはまるようであれば、目に病気がある可能性があります。
眼科受診を勧めましょう。**